

名器が醸す珠玉の音色

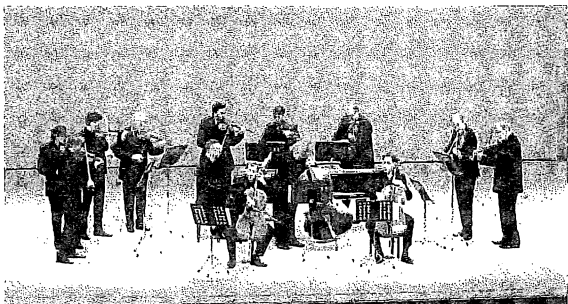
「ストラディヴァリウス演奏会」を聴いて

KTS開局50周年記念「ストラディヴァリウス サミット コンサート」(特別協賛・コアガス日本)が5日、鹿児島市民文化ホールであった。写真、KTS提供。日本の名器ストラディヴァリウスを、ベルリン・フィルのトップメンバーが演奏した。私は特別協賛の立場から、リハールを見学し、演奏家と対談する機会があった。公演に対する所感と共に紹介する。

ストラディヴァリウスとベルリン・フィルという最強の組み合わせに、いったいどんなコンサートになるのかと興味津々で来場した聴衆も多かっただろう。

ベルリン・フィルは、かつてカラヤンが率いて、その都会的かつ耽美的とも評される演奏で一世を風靡した。またストラディヴァリウスは、今回バイオリンはもちろん他の弦楽器まで参集したわけだから、音楽美の極致と言っても過言ではなかった。

寄稿 コーアガス日本代表取締役CEO 上 蘭 真歩



私はリハールを客席から見た。モーツアルトやチャイコフスキーのなじみのある曲。徹底的な喧々譁々の練習を何度も繰り返したのが印象的だった。これまで本番を重ねてきたにしても、なお完璧

な演奏に対する探求心は圧巻だった。

リハール直後、対談を行った。演奏家13人は開演前にもかかわらず、プロフェショナルの意味や鹿児島の若い音楽家への激励などについて、真摯で誠実な考えを述べてくれた。

彼らが定義付けるプロフェシヨナルとは、自分の体内に生命として音楽を宿らせ、それを最高の状態で聴衆に提供することだと発言した。超エリート集団でありながら、なお音楽という芸術に向き合うひたむきな謙虚さを感じた。

本番の演奏は、対談で披露した彼らの考えが、見事に体現された天下の逸品であった。管・弦を問わず名器になればなるほど、名手の奏者でなければ、頑固な楽器が持つ特有の繊細さを引き出せないものである。彼らに愛でられた貴婦人のごときストラディヴァリウスは、珠玉の音色を醸し出した。

その豊潤ながら聖なる響きは、雪解け直後の全く汚れない清水のように聴衆の体内に染みわたった。希代の演奏会であった。



うえぞの・まゆみ氏
1955年薩摩川内市生まれ。東京大学卒。2014年から現職。鹿児島市在住。